

題目

「作文の言語機能」が働く作文活動の創出

茨城キリスト教大学・大内善一

一 研究の目的

教育研究には①通時的(歴史的)研究と②共時的(同時代的)研究がある。私はこれまでこの両者を並行的に進めてきた。その成果を、例えば前者では『戦後作文教育史研究』(昭和五九年、教育出版センター)、『昭和戦前期の綴り方教育論にみる「形式」「内容」一元論―田中豊太郎の綴り方教育論を軸として―』(平成二四年、溪水社)、後者では『国語科教材分析の観点と方法』(平成二年、明治図書)、『思考を鍛える作文授業づくり―作文授業改革への提言―』(平成六年、明治図書)、『見たこと作文』の徹底研究』(平成六年、学事出版)等として上梓してきた。

一方、これら両者にまたがる研究もないがしるにしなければならないと考えている。優れた実践研究が十年、二十年というスパンで歴史の彼方に埋もれて行ってしまう。このような実践研究を通時的・共時的一体的研究として研究者が取り上げていくことも私たちの使命ではないかと考えている。

この方面からの研究の成果として、私は『作文授業づくりの到達点と課題』(平成八年、東京書籍)を上梓している。

本研究は、このような研究の延長線上に位置するものと考えている。

今回取り上げる実践研究は平成十三年に刊行された白石寿文・桜井直男編著『小学校作文の指導―広がる世界・深まる絆―』(銀の鈴社)である。この実践書は一般的な出版ルートには乗っていない書籍なので、大方の目には触れにくい出版物となっている。

ちなみに、白石寿文・桜井直男編著になる先行する実践書には『小学校作文の授業―練習学習と書くことを楽しむ学習―』(昭和六一年、教育出版センター)、『小学校作文の単元―個人文集への誘い―』(平成元年、教育出版センター)の二冊がある。これらの実践書のうち、後者については前掲の『作文授業づくりの到達点と課題』において詳細な考察を加えている。

今回はこの研究成果を踏まえつつ、平成十三

年に刊行された『小学校作文の指導―広がる世界・深まる絆―』に収録されている実践に関して考察を加えて行くことにする。

二 前著『小学校作文の授業―個人文集への誘い―』に関する考察の結果

白石寿文・桜井直男を中心とした一連の小学校作文授業づくりの研究は、昭和五七年来、佐賀県の作文教育研究会の同人によって行われている。指導顧問は佐賀大学教育学部教授であった白石寿文(現在は佐賀大学名誉教授)である。

これら一連の作文授業づくりの研究で対象となっているのは、いずれも短時間で指導の可能な「短作文」である。

そこで、前著に関して私が行った考察の結果について簡略に紹介しておくことにする。

前著では、学期毎に大きなひとまとまりの単元を設けて、その下に十本前後の小単元が位置づけられている。これらの単元構成は一年から六年まで一貫している。これらの小単元の総数は一六二本であった。そして、それぞれの小単元で書き上げられた作品によって、毎学期一冊ずつの個人文集が制作されていくという趣向である。

前掲の拙著『作文授業づくりの到達点と課題』においては、これら一六二本の小単元で取り上げられている「作文ジャンル」と「題材」、及び「指導過程・方法」上の創意工夫に関して詳細な考察を加えている。

その結果、白石・桜井達による「小学校作文の単元」の意義と課題を次のように取り出した。

〈意義〉

①学期毎の大単元のもとにいくつかの短時間構成の小単元を配して、教科書作文単元を補充し得る提案としている。また、指導の成果が学期毎に「個人文集」としてまとめられることで、作文学習の継続性と作文学習意欲の喚起とが図られている。

②個々の小単元の単元名が、指導意識を前面に出さないうで、子供サイドに立って、子供

が親しみやすいようにつけられている。

③個々の小単元で取り上げられている作文ジャンルの多くは、子供が書く目的や相手を自覚しやすいものとなっている。しかも、その種類は多彩である。

④子供の生活実態を考慮して、空想・想像的な作文ジャンルを数多く取り上げたことは、以後の作文授業づくりに与えた影響から見ても意義深いものがある。

⑤指導のステップが段階を踏んでしかも簡潔に示されている点も、これまでの実践提案にはあまり見られないような特色の一つである。

⑥各小単元ごとによく工夫されたワークシートが必ず示されていて、提案そのものを実際的なものとしている。作文教材開発方法への一つの道を切り開いたものと見なすことができる。

〈課題〉

①お決まりの「書き出し」方を禁止させるといった点が一つの研究課題として提示されていたが、実際の提案の中では、具体的にその指導の手立てなどが十分には示されていないかった。

②短時間構成の小単元とはいえ、指導時間を明記しておくべきである。

(前掲書、一五九～一六〇頁)

三 『小学校作文の指導―広がる世界・深まる絆―』実践研究の特色

平成元年に刊行された白石・桜井達の『小学校作文の単元―個人文集への誘い―』では、先に示したように、小単元による多彩なアイデア題材・多様な作文ジャンルでの指導に特色があった。また、指導過程・方法にも創意工夫が見られ、一六二本の小単元のほとんどに簡潔な「指導ステップ」が示されていて、いつでも追試の可能な記載方法が取られていた。

要するに、一六二本の小単元の提示そのものが作文教材開発方法の優れた提案となっていた。これに対して、今回検討する実践研究では、右の実践研究での成果を踏まえつつ、いくつかな新たな提案が行われている。以下、これらの新たな提案について考察を加え、その意義と課題

を明らかにしていくことにする。

今回対象とする実践研究には、大きな特色が三点ある。

一点目は、今回の実践研究が「作文の言語機能」を意識しつつ構想されたものであるということである。「作文の言語機能」とは、かつて八木橋雄次郎が『作文教育』第二三集(昭和四八年六月刊)に「作文教育改善の必要と方向」と題して発表した論文から示唆を得たものである。八木橋の提案が巻末の「補章 自己表現の喜びを」に以下のように引用されている。

〈資料1〉

手紙・記録・報告のような文章では、伝達の機能が強く働いており、人間の連帯を強めるものである。

感想・意見・論説のような文章では、思考の機能が強く働いており、人間を深め、深化させるものである。

詩・生活文・物語のような文章では、創造の機能が強く働いており、人間の可能性を開発するものである。

(二一五頁)

要するに、ここで八木橋が指摘していた「伝達」「思考」「創造」という三つの「言語機能」を意識しつつ、今回の実践研究に取り組んできたということである。

二点目は、「子どもが楽しく意欲的に作文活動を展開して」いくことの出来る作文のネタ(題材・素材)の開発ということである。

本書の「第一章 短作文の学習30の窓」では文字通り三十本の実践事例が紹介されている。特にこれら三十本の事例で取り上げられている「素材」が「30の窓」のことであると見なし、差し支えないだろう。

これらの三十本の実践事例の中で注目させられるのは「素材を生かす手立て」である。これは言い替えば、「指導方法上の創意工夫」ということである。また、前回の実践研究の中にも見られた多様な〈作文ジャンル〉によって作文活動を創り出すという趣旨も継承されていると見なすことが出来る。

三点目は、本書の副題に掲げられている「広がる世界・深まる絆」という実践上の意図にある。「広がる世界」というのは、学習者である子どもたちのものの見方・考え方・感じ方の拡大、

すなわち認識能力の拡大深化が意図されていると見なすことができよう。この認識能力の拡大深化を多様な「素材」の下で書かせることによって陶冶していくことが目指されているということである。

そして、「深まる絆」とは、本書の「第二章 心をつなぐ作文活動」に収録されている十本の実践事例によって理解することが出来る。

要するに、作文活動における子ども同士の共同作業や感想・意見の交流、また、書き上げた作文を両親や地域の大人の人達に読んでもらって感想などを書いて頂いたり、それに対して手紙を書いたりする交流活動を通して相互の〈絆〉を深めていくことである。

四 三点の特色に関する考察

(1) 「作文の言語機能」を意識した実践

「伝達」「思考」「創造」の三つの言語機能を意識した実践は、主要には「第二章 心をつなぐ作文活動」において行われている。

第二章では、レジュメの三〜四頁に掲げておいたような実践事例が報告されている。

この内訳は、「伝達」機能「気持ちや考えを伝える」実践が三編、「思考」機能「考えを確かかなものとする」実践が三編、「創造」機能「楽しみ味わうものを創り出す」実践が三編ずつ収められている。また、最後には「総合的な学習と作文」の実践も収められていて、ここでは三つの言語機能の全てが意識された作文活動が組み込まれている。

「伝達」機能に主眼をおいた実践では、いずれも『何のために書くのか』『誰に書くのか』という目的意識や相手意識を明確にさせる「(一四一頁)ということに意が用いられている。

「教えよう、ひみつやニュースを」の実践では、「ひみつ」の場合は特に相手を「一人だけに決めて書こう」という指示を与えている。「ニュース」の場合は、相手を「友達」から「家族」にまで広げて書かせている。

「マリーゴールドに沿えて」の実践では、これまでの栽培活動を振り返らせつつ「語りかけるように」「自分たちの花で町中を美しくして欲しいという願いをこめて」書くようにとの指示を与えている。また、「書く相手が見えなくても、さも知り合いかのように、また、心と心がつながっているかのように書き綴る」ようにとの指

示が与えられている。

「思考」機能に主眼をおいた実践ではいずれも「考えを確かなものとする」ための作文活動が仕組まれている。

『なぜ』心とお話ししてみよう」の実践では、「なぜ」という問いかけの心をもつて書かせる工夫が成されている。

「パンは、だれが食べますか」の実践では、物語の登場人物の発する言葉や行動への「考えを書き、更に書いたことについて友達と考えを交流」させることで考えを確かなものとしていくことが図られている。

「創造」機能に主眼をおいた実践ではいずれも「創造を楽しみ、それを短い話に創り出す面白さを体験させる」ところに狙いが置かれている。

「ふしぎな森のたんけん」の実践では、『おい、○○さん。』という書き出しで、子どもが考えた動物を登場させて、その動物との会話を書く」という活動をさせている。また、「うっそうと繁った森の絵を見せながら、『ここは、どのようなところだろうか』と問いかけ、作品への導入」を図っている。

「ようこそ、マイクロキッズの世界へ」の実践では、「自分たちが体長五センチメートルのマイクロキッズになったという設定で、ことばによるバーチャル体験」をさせている。

なお、これら三つの言語機能は「第一章 短作文の学習30の窓」に収録されている三十本の事例でも意識されて実践されている。

ちなみに、これらの「30の窓」の内訳は「伝達」実践十二本、「思考」実践四本、「創造」実践二五本である。総計の本数が多くなっているのは、一つの実践に二つないし三つの言語機能が含まれている場合があったからである。

ただ、「第一章」に収録されている三十本の実践の主眼が基本的には多様な「素材」の発掘というところにあつたようなので、三つの言語機能の配分には偏りが出てしまったということであろう。

(2) 「楽しく意欲的に作文活動を展開」出来る

三十の素材

「第一章 短作文の学習30の窓」に収録されている三十本の実践の中で取り上げられている三十種類の「素材」には、「絵」や「新聞記事」「子どもたちの会話」「一つの文」「タイトルや

小見出し」「色や音」「物の性能」「漫画」「感想の書き出し」「自分の写真」「子どもたちの身近なことば」「子どもたちにとってあまり身近でないことば」5W1H」「詩や文章の一部」「絵の人物」「図形や記号」「ある物」「ある人」「絵の中での会話」「身近にある物」「結びの文」「友達」「ある書き出し」「広告」「ある物」「抽象的・象徴的な題」「行動・様子・会話・情景」等が出てくる。

なお、これらの「素材」以外で「素材」というよりは「活動」と見なせるものを取り上げられている実践がある。「対談、クイズ、問答」「リレー」等である。「活動」＝「素材」となってしまうている事例で、本来の「素材」からはやらずれてしまった事例と言えよう。

取り上げられている「素材」の中で、同じ新聞からの素材でも「記事」を取り上げる場合や新聞の「タイトル・写真」を取り上げる場合とが提案されていて、「素材」を選ぶ際の参考になる視点が示されている。

また、興味をそえられる「素材」としては、「子どもたちの会話」「色や音」「物の性能」「図形や記号」等のユニークなものを取り上げられていて、参考になるう。

例えば、**窓4**の「子どもたちの会話」を素材とした実践を見てみよう。

五年生の宿泊訓練の「飯ごう炊飯」の時に子どもたちの話し声から教師が拾ってやった「会話」(「ねえ、この木、重たかあ、だれか来て」「細い木も拾って来んといかん」「木がうまく切れないよう」「火が消えちゃうよ」「わあ、けむたかあ、目にしみる」「けむりがこつちにくる」)に基づいて次の様な作品が作られている。

〈資料2〉

苦勞した火おこし

五年児童

宿泊訓練の二日目、山あいの近くで飯ごう炊飯をするようになりました。

はじめの火おこしが大変です。林の中から燃やす木を拾ってこなければなりません。わたしはそら辺を走り回って木を集めました。「ねえ、この木、重たかあ、だれか来て。」と、大きな声で友達を呼びました。Aさんが走ってきて手伝ってくれました。近くにいたBさんは「細い木も拾わんといかん。」と、小枝をたくさん集めています。いよいよ火おこしです。マッチがなかなかいふことをきいてくれません。一方、となりでは大きな木をなたでわっている人も

います。「それ、よいしょ、この木なかなかわれないよ。」「もう一度やってみたら。」みんなそれぞれに自分の仕事に真けんです。やっと火がついて燃え始めたかと思うと、けむりがもくもくと出始めました。「わあ、けむたかあ、目にしみる。」と言って目をこすっている人。「けむりがこつちにくるう。」と言って逃げ回っている人。火をおこすだけでも大変でした。(三三頁)

傍線を付した箇所が子どもたちの話し声から教師が拾ってやった「会話」である。教師に拾ってもらった「会話」であるが、子どもたちはこのように巧みに取り入れて作品を作り上げている。

もう一つ**窓8**の「物の性能」を素材とした実践を見てみよう。

この素材は、人気漫画の主人公ドラエモンがお腹から様々な奇抜な道具を取り出すことにヒントを得ている。「人の心が見通せるメガネ」「時速百キロメートル走れる運動靴」「過去と未来を行き来できる腕時計」等が挙げられている。次の作品は「人の心が見通せるメガネ」を素材として作られている。

〈資料3〉

ふしぎなめがね

五年児童

このめがねの名前は「なんでもめがね」です。自分が見たいものは何でも見ることが出来ます。めがねをかけて、思ったり、考えたりするだけでいいのです。テストの時、どうしても答えが解らない時、頭の中で答えは何かなあと思っています。すると、その答えがうき上がって見えてくるのです。とてもふしぎです。めがねをかけると人の心も見えてきます。学校から帰った時、お母さんの顔を見ながら何か言われるかなあと思うと、「今日は宿題、ないかしら。」「おつかいに行ってくれない。」

というお母さんの声がめがねから聞こえてきます。そのほかに未来や過去の様子を見ることもできます。(四七頁)

子どもたちに「のびのび想像の翼を広げ」させるために、「教師が範例を示したり、しっかりと自由な雰囲気での話し合い」をさせるといった指導の手立てが講じられている。

ところで、これら三十本の事例には、「素材を

生かす手立て」が紹介されている。例えば、**窓1**の「絵」という素材では、①「一枚の絵から」、②「二枚の異質な絵から」、③「三枚の絵を自由な順番にして」といったように目先を変えた実践事例が報告されている。

②の「二枚の異質な絵から」の実践では、「子どもが描いた絵と教師が描いた絵を組み合わせて話をつく」らせている。

次のような作品が作られている。

〈資料4〉

サッカーでうちゅうりよう 三年児童

ぼくは、今サッカーにむちゅうだ。家に帰って、ランドセルを部屋にほうりこむとお母さんにつかまらないうちに近くの公園に走っていく。今日は、せっかくはやくきたのに、友達はまだ来ていない。一人でボールをけていると、後ろから「ぼくもやらせて」とばかりかいかい声でした。びつくりしてふりむくとそこには、ぼくらくらいの大きさのかいじゅうが立っていた。「ふええ、どっからきたの?」「あっち」かいじゅうは空をゆびさした。「空から見たら君ともたのしそうだもの。ぼくに教えてくれたら、お札にうちゅうりようにしようたいするよ。」「ほん」と?」〈略〉 (二十〜二十一頁)

絵の組み合わせは、隣同士の児童が描いた二枚の絵で行わせても良いと提案されている。

窓3の「新聞のタイトル・写真」という素材の場合は、①「季節のことばから俳句を作る」、②「天気概況」を使って、天気予報士と自分との電話対談を書く、③「今週の幸運」欄や「暮らしの伝言板」や「広告の車」の写真から書く、等の実践が紹介されている。

例えば、②の「天気概況」では、天気概況を読み、天気予報士と自分が電話で対談する趣向から次の様な作品が作られている。

〈資料5〉

天気予報の解説「各地の天気概況」から 五年児童

*「もしもし、今からキャンプに行こうと思っっているんですが、天気はどうですか。」「

・「どちらへ行かれるんですか。」「

*「松江にいく予定なんですけど。」「

・「松江ですか。松江は、宍道湖などがあってきれいですよね。しかし、困りましたね。松江は今日は降水確率八十パーセントの大雨ですよ。」「

*「えっ、大雨ですか。昼からはどうですか。」「

・昼も降水確率八十パーセント、夜も六十パーセン

トで一日中大雨ですよ。キャンプは無理でしょう。」「
*「そうですね。テントが流されちゃいますね。それでは、今日天気がいいのはどこですか。」「

・今日は、鹿児島や宮崎や沖縄などが、高気圧におおわれて晴天ですよ。絶好のキャンプ日和ですよ。」「

*「分かりました。予定を変更して、南九州の方でキャンプすることにします。鹿児島や宮崎なら車で行けますし、海が近いですからのんびり釣りが出来そうです。」「

・「それはいいですね。でも、台風一号が南の台湾の方から近づいて来ていますので、早めにお帰り下さいね。沿岸は、波が次第に高くなりますし、風も強くなってきます。テントが飛ばされちゃいますよ。ろ

*「その時は、台風にのって、テントごと佐賀に帰るっていうのもいいですね。ハハハ…。」 (二七〜八頁)

「天気概況」という素材からは、外に「野球の試合をしたいかどうか」「凧上げをしたいかどうか」がいいか(風の向きは)「今、スキーはどこでできるか」「明日の遠足(運動会・雪合戦)はできそうか」といった題材を与えて様々な作品を作り出すことが提案されている。

また、**窓9**の「漫画」という素材では、①「漫画の台詞や絵を使って、会話文と地の文の描き方を学ばせる」、②「漫画の登場人物や作者宛に手紙を書かせたり、漫画の説明文、コマースャル文、漫画対談のシナリオ作り等をさせる」といった実践が紹介されている。

さらに、**窓11**の「自分の写真」という素材では、①「自分のアルバムから好きな写真を選んで、写真の内容を説明風にかける」、②「写真からその子のよさをたくさん見つけ、それを使って作り話を書いたり、写真には写っていないけど、その周りにいるであろう人を考え、周りの人の思いや周りの人の紹介を書く」等の実践も紹介されている。

このように、一つの「素材」からやや目先を変えた複数の実践事例が紹介されていて、同一「素材」からも変化に富んだ実践を創り出す事が可能であることを提起している。

なお、当然のことながら、同一「素材」から変化にとんだ実践を創り出す事によって、使用

されている「作文ジャンル」にも「俳句」「対談文」「想像文」「生活感想文」「物語」「説明文」「手紙」「シナリオ文」「日記」「通信文」等と多様なものが出現している。「素材」に併せて「作文ジャンル」が意識されていることも窺えるところである。

(3) 「広がる世界・深まる絆」という意図

三つ目のこの特色は、主要には「第二章 心をつなぐ作文活動」に紹介されている事例の中で意図的に仕組まれている。

第二章の扉に、指導に際しては「心がもつと交流するように、作文活動の場を設定し計画しなければならぬ」とし、「書くことによって、書いたあとの処理によって、考えや心の交流を深めてくれたら」（二四〇頁）との願いを込めたと述べられている。

「伝達」機能を意識した「実践Ⅰ」「教えよう、ひみつやニュースを」では、①「自分の一週間の生活を振り返り、みんなに教えたいことを書かせている」、②「子ども同士の読み合いの交流を通して文の質を上げる方策としている」、③「読んでもらったあとに友達や家族から感想をもらう」といった手立てが講じられている。

「実践Ⅱ」「マリーゴールドにそえて」では、「育てたマリーゴールドの花には手紙を添えて、日頃世話になっている人、隣近所の人々、親戚の人や学校の近くの役場・農協、コンビニ、郵便局等に届けさせる」という手立てが講じられている。

「思考」機能を意識した「実践Ⅰ」「なぜ』心とお話ししてみよう」では、①「一人一人の思いをつなげて共同で作文を書かせる」、②「友達同士での感想の交流を行う」という手立てが紹介されている。

「実践Ⅲ」「パンは、だれが食べますか」では、「書き上げた『続き話』の中で共感する言葉や反発する言葉を手掛かりにお互いに意見や感想を出し合わせたり、意見をリレーさせて考えを深めさせる」という手立てが講じられている。

「創造」機能を意識した「実践Ⅰ」「ふしぎな森のたんけん」では、①「友達の作品を読み、感想をメッセージとして書かせている」、②「出来上がった作品を集めて一冊の『森のたんけん

き』として製本し、回覧して感想の交流をさせたり、保護者からの感想の手紙の交流も行う」といった手立てが講じられている。

三つの言語機能を全て意識した実践「総合的な学習と作文」の「環境について考える」では、①「書いた作文について、意見の交流を行う」、②書き上げた作文やパンフレット・ポスターは公民館に置かせてもらい、地域の人々からの声を手紙等によって届けて貰っている。頂いたこれらの声に対するお礼の返事を書いて再び公民館に置かせて貰っている」等の手立てが講じられている。

要するに、これらの実践を通して、傍線を付した箇所からも理解出来るように、作文活動における子ども同士の共同作業や感想・意見の交流、また、書き上げた作文を両親や地域の大人の人達に読んでもらって感想などを書いて貰ったり、それに対するお礼の手紙を書いたりする交流活動によって、ものの方や考え方・感じ方を広げ、相互の〈絆〉を深めていくことが意図されていたのである。

五 意義と課題

今回取り上げた白石・桜井達による作文授業づくり実践の意義と課題についてまとめておこう。

まず、作文活動の「伝達」「思考」「創造」という三つの「言語機能」を意識することで教師自身が書く活動の教育的意義を明確に自覚して作文指導を行えるようにしている。

また、作文指導のための「素材」を意識的に開発することを目指した結果、従来はあまり見かけられなかった「新聞のタイトル・写真」「子どもたちの会話」「色や音」「物の性能」「図形や記号」等の素材が見出されている。

さらに、「広がる世界・深まる絆」という側面を意図的に仕組むことによって、学習者相互及び身近な人々との考えや心の交流を通してものの方・考え方・感じ方を広げ、人と人との心の交流・絆を深めることを可能としている。

課題としては、「伝達」や「思考」機能を意識した実践の開発に努めていくことが期待される。